

# 厳選の結果、内容が3割削減されたものになっただろうか（社会科）

桑 野 昌

（文教大学教育学部）

## An Assessment of the Revised Textbooks of Social Studies ; Has their content really been reduced by thirty percent ?

KUWANO SAKAE

（Faculty of Education, Bunkyo University）

### 要 旨

学習内容の厳選をはかったといわれているが、果たして結果はどうであろうか。記述量は削減されているが、内容は減少しているとはいえないようである。学習内容を統合してわかりやすく工夫されているが、学習指導要領は最低の基準を示したものであるとすると、移行、統合し、圧縮されてできた隙間は、わかる授業をするために、教師が埋めていかなければならないのである。今後一層の教材研究を深める必要があることを自覚してかかろう。

今回の指導要領の改訂で、小・中の社会科の教科書がどのように改訂されたか、いくつかの視点を挙げて述べることにする。

### 1. 教育内容厳選

教育内容厳選の視点として7項目が上げられているが、社会科として特に関連の深いものの2項目を挙げると、

実際の指導において、単なる知識の伝達や暗記に陥りがちな内容を削除する。

学校段階における重点の置き方に一層の工夫を加えるなどして、各学校段階間または各学年間で重複する内容については、できるだけ精選を図る。としている。については「中学校の地理における諸地

域の産業等の詳細かつ網羅的な学習、歴史における各時代の文化史。

については、わが国の歴史に関する学習などは繰り返し学習する効果もあるが、小学校と中学校とで通史を二度行わないようにすることが、それぞれ例示されている。

### 2. 内容の削除・移行等

内容の削除・移行等はどうのような意図で行われたか。社会科においては次のような考え方に立って行われてきている。

\* 網羅的で知識の記憶に偏った学習にならないよう、指導内容を基礎的・基本的事項に削減・重点化すること。

\* 高度になりがちな内容は、上の学年や学

校段階に移行・統合、または削除する。

- \* 各学校において地域に関する学習が弾力的に行えるよう、小学校第3・4学年の内容を2学年にまとめて示すこと。
- \* 各学校が地域の実態や児童生徒の興味・関心等に応じた指導が一層充実するよう、事例等を選択できるようにする。

以上の趣旨のもとに「削除」「移行・統合」「集約・統合」「選択」といった方法がとられている。具体的には、

「削除」 社会科の学習内容から削除すること。

「移行・統合」 内容を2学年にまとめて示したり、関連して指導する方が効果的な内容をまとめたりすること。

「選択」 学習の事例や対象を、複数のうちから選択して学習できるようにすること。

### 3. 改定の考え方と新社会科像

教育課程審議会の答申をふまえ、次のような視点を重視して各学年の目標や内容の改定が行われている。

- \* 児童・生徒が、地域社会や我が国の国土や歴史に対する理解と愛情を一層深めるとともに、世界の人々とともに生きていくことが大切であることを自覚できるようにすること。
- \* 社会的事象に関心をもち、公正に判断できるように各学年の発達段階に応じて、観察・調査したり、各種の資料を活用したり、調べたことことを表現したりするとともに、社会的事象の意味や特色などを考える力を育てるようにすること。

以上のことからわかるように、社会科の特色として、

国際社会に生きる日本人を育てる社会科。

覚える社会科から、調べて考える社会科。

調べ方、学び方の習得を重視する社会科。

地域の実態に密着した特色ある社会科。

ということが出来る。

### 4. 具体的な内容の改定について

#### (1) 小学校

小学校3・4の教科書が、移行・統合という形で合本になっていることが一番大きな変化といってよいであろう。改定前は他の教科書と同じように3学年上巻・下巻、4学年も上巻・下巻であったものが、これを3学年と4学年の2年間で3・4上巻、3・4下巻の2冊に合本と大きく改定になった。頁数からのみ比較すると、A社が80頁、B社が51頁に減少している。紙面の数だけで内容の削減をみることはできないが、内容の削減と高学年への移行が多いことを示している。さらに詳細に見てみると、旧3年の上巻と新3・4上巻の学習内容はほとんど変化がない。新3・4の下巻は、従来の3年下巻と4年下巻の他に、5年で取り扱っていた「伝統的産業」が入り、「いろいろな土地の暮らし」が5年に移行している。担当学年の教師が指導要領の趣旨や単元のねらいをよく検討して指導しないと、混乱を起こしかねない。

5年も4年への移行と中学校地理分野への移行、「運輸業」の削除などがあり、若干の内容軽減がみられるほか、編集の仕方に旧教科書とは多少の違いがみられる。上巻は新旧ともに「食糧生産」と「工業生産」に終始しているが、「食糧生産」では記述が「米作り」と「水産業」を重点的に取り上げ、野菜・果物・酪農については、A・B社ともに簡単な産地の分布図を入れてあるだけである。指導書では、「米のほか、野菜・果物・畜産物・水産物などがあり、国民の食生活は様々な食糧生産によって支えられていることを調べる。」という文言があるので、米と水産物だけでは記載上片手落ちの感がある。水産物を扱うより野菜や果物を扱った方が良い地域の教師が、米作りと同じ追求の仕方でも学習させてくれることを期待したいところである。

また一方では、旧4年で扱っていた「地形や気候条件からみて特色ある地域の人々の生

活」が5年に移行している。従来だと土地条件の異なる地域が2箇所、気候条件の異なる地域が2箇所ずつ記載されていたが、今回の改定ではA・B社とも気候の異なる地域（暖かい地域と寒い地域）を残し、土地条件に特色のある地域（高原・低地）を紙面から削除している。これも「自然環境に適応しながら生活をしていることを具体的に調べる。」とあるので、土地条件の異なる地域を2箇所とも除くのは片手落ちである。低地（輪中）高原（野辺山原）についても、国内の特色ある地域として小学校の児童に覚えさせておくことは、日本の国土全体の学習をさせる前段階で、国土の特色として「点」で位置付けて置く重要な要素であるはずである。これは地域に即して選択するという性格のものではない。特に野辺山原（または嬭恋）の高原野菜の栽培については、霜の降りない5ヶ月ほどの間に、朝晩冷え込むという高原の気候の特色と、寒い時間帯のある（日格差が大）方が硬く捲くという結球野菜の特色を結び付けて、グリーンボール（キャベツを小型化して葉を柔らかくしたもの）を生み出した農家の努力と工夫を学び取ることができる地域である。（輪中については紙面の都合上割愛したい）教科書から外れたから取り扱わないということのないように担当学年の教師は注意したいものである。

公害の取り扱いについては、従来工業生産の学習の続きに位置付けられていたものが、「公害から国民の健康や生活環境を守る事の大切さを調べる」に包含され「環境を守る」という単元に統一された。B社では水産業の最後に、漁師が山に入って植林するという記述があるが、こうした内容は環境問題を解決するひとつの有力な事例として、今後充実を図る必要があると考える。

6年の歴史学習についてはコラム形式のものが充実され、説明も分かりやすくなってきているが、本文と写真資料については大きな

改定は少ないようである。巻末の「地球の環境と平和」は新社会科像にうたわれている精神がよく反映される場所であるが、国際紛争については中途半端な扱いになる心配も予想されるので、中学校の歴史の関連部分に移行して、小学校では環境保全について重点化してはどうか考えている。

## （2）中学校

改定前の教科書はA5版であったものが、改定後はB5版と大きくなり、全頁総てカラー刷りになった。内容はともかくたいへん見易くなり、生徒の興味・関心もかなりアップしていることは間違いない。写真ばかりでなく図表やグラフも非常に分かり易くなり、学習効果も大いに期待できるものである。

反面、紙面数だけでは内容について云々できないが、A社の地理が64%（本文ページのみ）歴史が65%、公民が73%に圧縮されている。B社の地理が84%、歴史が73%、公民が87%でこれもかなりの圧縮である。これはあくまで紙面数の問題であって全文を読み比べての比較ではないが、教科書が大きくなっても写真資料や図表の占める割合が大きくなっているし、文字のポイントも変化がないので、概括して頁数の減少した分だけ本文が圧縮されたことにもなりかねない。

もうひとつの大きな変化は地理の教科書である。改定前は世界の国々に関する記述が全半にあり、A社が131頁、B社が115ページの紙面を確保していた。ところが改定後はA社が58%、B社が47%に大幅縮小した。取り扱い方も改定前は内容的にも、解説の仕方かなり詳しく、まさに網羅的な記述であったのが、（高校の教科書的な記述に近かったが）かなり平易にわかりやすく改定されている。これは大きな改善である。しかもA社は[である。]調から[です。ます。]調に改められている。

歴史・公民においても、両社とも紙面が70~73%に圧縮されており、両社の歴史は、前

述のようにイギリスの産業革命、フランスの名誉革命。アメリカの独立など、外国に関する記述を大幅に削減している。

公民についても同様のことが言えるが、移行・統合している部分がかかなり見受けられる。

## 5. 教科書とは

以上、たいへん大雑把に小・中学校の改定前と改定後の教科書について自分なりに見てきたが、一口に言って紙面の削減は見られるものの、果たして内容の削減まで完全にできたかどうか疑問に思われるところである。むしろ記述が簡単になった分だけ教師が隙間を埋めていかなければならないのである。3776Mの富士山に登るべきところを、2702Mの白山で済ますわけには行かないのである。内容の削減は容認されても、質や度合いの低下は許されないのである。もともと教科書の中身をどれだけ徹底させることができるかは、(基礎学力の定着が図れるかは)教師の教材研究の深さに比例するものであり、教科書の善し悪しで児童生徒の学力が決まるものではない。私は教科書は米飯であり、お菜は教師が調理して米飯を美味しく食べさせることが教師の仕事であると考えている。毎回味噌汁と漬物と干物だけでは児童・生徒は飽きてし

まい、食欲が出てこない。つまり意欲的に学習する気が起きないのである。生きのいい刺身や温かい天ぷらを食べさせるべく、教師が資料を収集し、分析し、開発して、喜んで取り組むよう工夫と努力を惜しまなければ、児童・生徒はもっと食べたい。(もっと調べたい。)と言い出すに決まっている。教科書の質や度合いを云々するまえに、指導要領を熟読して、教科書の行間に潜んでいる社会的事象の意味を、教師がまず正しく掴み取ることが先決ではなからうか。それに力を傾注することに徹すれば、教師自身が自信とゆとりを持って学習指導ができるし、児童生徒の学習活動をより楽しく豊かなものにできると信じている。

教科書は、教師が教材研究するための「よき叩き台」と考えて取り組むべきではなからうか。

## 参考文献

小学校学習指導要領解説 文部省

「社会科の基礎・基本」北俊夫著(岐阜大学教育学部教授)明治図書

小学校社会科教科書 3・4・5・6年

中学校地理・歴史・公民教科書

A社.東京書籍 B社.教育出版